



春夏秋冬中

試し読み

堀井忠道の或る休日く其の式

「堀井様」

「あつ…」

鈴を転がすような、玲々とした声音である。

にも関わらず。イヤ、だからこそ堀井忠道は驚愕した。

感情が薄いかと思われるほどに、沈着冷静な忠道に似合わず、

マヌケな声を思わずあげてしまった。

そして、花が綻ぶようなまぶしい笑顔を浮かべて自分を見つめる娘を見て、忠道は深く深く溜め息を吐いた。

子供達の歓声を追うように、忠道と十兵衛は見回りの途中にある、小さな手習い所に差し掛かった。妾宅風の小さな一軒家だ。陽は中天に懸かろうとしている。子供たちは昼餉を食べるために、一旦家へ帰るのであろう。轟くようだった子供達の声は、既に遠ざかっていた。

「オヤ、堀井の旦那。お勤めご苦労様です」

年増のちよつと艶を含んだ声がある。手習い所の師匠だ。

自ら朴念仁を自覚する忠道でさえ、この声を聞くと、袖を引かれたかのように足を止めてしまう。この艶があった声は、恐らくこの女の生来のものだから、忠道だけにこうした声音で話し掛けるので

はあるまいと、不可解な行動をする己を理解しようと思ってみる。だから、別に足を止めなくても、とも思うのだ。だが、何故か足を止めてしまう。この所いっもだ。もしかしたら、忠道の預かり知らぬ、内なる男が反応して、勝手に足を止めてしまうのかもしれない。だから、忠道はこの師匠はちよつと苦手だ。

「ああ、師匠…」

別にこの師匠に何か話しかけようと思つて足を止めたわけではないので、どう反応しようかと煩悶する内に、いつもにやうにやと何が何だか判らぬ、尻すぼみな受け答えになる。そして、これもいつものことなのだが、師匠はそんな忠道を見て、うふふ、と笑う。

…やっぱりからかわれて居るのかもしれない。苦手だ…。

そんな忠道を救うように、戸を開ける音とともに涼やかな声が掛かる。

「あら、堀井様」

いつもと変わらず元気な声だ。

「ああ、お薦さん」

忠道も応える。心なしか、ほつとした声なのが自分でも判る。それを見て、師匠がまた、うふふ、と笑つて、手習い所へ戻つていった。

やっぱり苦手だ、と思う。

「お勤めご苦労様です」

お薦は、少し前からこの手習い所で子供たちを教える手伝いをし

ている。言葉を交わすようになったのはここ二月、三月くらいのことだ。町娘にしては随分とおっとりとした娘で、女全般を苦手とする忠道でも比較的話易いと感じる娘であった。

「変わりはないかエ」

「はい。お師匠さんも親切にしてくださいまし、子供たちも可愛くて」

にっこりと笑って、お蔭は応える。柔らかい声が、耳に心地よい。

「それは良かった。では」

いつもと変わらぬ受け答えを交わして、忠道達は見回りへ戻る。それでも、心なしか、忠道の足取りも軽くなったような気がするのは、気のせいだろうか。

いや、気のせいだ。

忠道は、自分を諫める。

最近、こんなことを思うことが多い。それこそ、自分の中にもう一人男が居るようで、不気味にすら思うことがある。

「旦那」

「どうした、十兵衛」

顔、顔、と十兵衛が指差しして、にやつとする。

う、と微かに呻いて、忠道は笑みを消そうとして手を顔にやろうとするが、十兵衛がからかっているだけだと思いついて、伸ばした手を誤魔化そうと、あごの辺りを摩る。

「お蔭さんと会った後は、いつも嬉しそうですぜ」

「馬鹿なことを言うなイ」

鼻屑をして同心が勤まるものか、といい訳染みたことを呟いたが、十兵衛は逃さなかった。

「イヤイヤ、あつしの目は誤魔化せませんぜ」

笑いを含んだ十兵衛の声を聞いて、忠道は少し不安になる。

そうだろうか。

「ナニ、最初はお蔭さんかと思つて、若もお役目一筋じゃア、見る目も狂うと心配してたんですがね。どうもそうじゃアねエ。そこで気づいたね。お蔭さんがあすこイ来なすつてからだね」

イヤ、いつも師匠を苦手だと思つてしまうから、お蔭と話してほつただけだろう。師匠に比べて、少し話しやすいと言っただけで、それだけのことだ。

「馬鹿なことを」

ふるふると頭を軽く振って、忠道は歩き始めた。十兵衛は笑いながら、後に続いた。

〇〇〇

南町奉行所定廻り同心、堀井忠道の朝は、老母の小言から始まる。はずであった。

しかし、今朝は違う。

夏も冬も、晴れも雨も、そしてお勤めがあるうと無かろうと関係なく忠道に浴びせられるはずのお小言は、今朝ばかりはさすがに鳴りを静めている。と言うのも、忠道の母、佐知が珍しく感冒に罹つ

向こうの木戸番

神田須田町は旅籠町とは神田川を挟んだ向こう側になる。船が入ってくる川には当然河岸があるもので、ここでは毎日青物市が立っている。この青物市に毎朝出向くのが料理旅籠『千膳屋』の料理頭、満吉だ。雨の日も、風の日も日本橋河岸まで足を運んでいたものが一昨年の秋頃から腰がいけなくなつて魚屋に頼むようになっていた。寒い日などは数間進んでは止まって腰を撫でさすり、また数間のたりのたりと歩いては休むといったぐあいだった。三年前の春に日本橋の料亭で働いていた息子を板場に入れた、無論、他の弟子と同じく住み込みだ。まだまだ息子や弟子達に店の一等大事な台所を任せられない、板場ではびんしゃんしているが一方で寄る年波には勝てない、とおもうようにもなつていた。

歩くのを止めて息を吐く。うっかりしていた、今日は晒しを巻いていない。重ね着した裾の間からも寒さが入り込んできている。横を天秤棒を担いだ納豆売りが駆けて行った、素足に股引と半纏といった軽快な姿だった。

「……」

それをちらりと見送つてまた歩き出す。やがて若々しくつやのある声が背中から聞こえてきた。どこからか飯の炊ける匂いもして思

わず舌打ちしていた、河岸に働く者達のための飯屋だろう、すぐにも起き出す。

「えい、なつとなつと〜い……」

今朝はしらすの卵とじと焼き魚、そして葉物の小鉢をつける。

いまの時は白菜、大根、蕪、なまこ、さば、そしてこれから雁。鰯は干したのと塩漬けにしたのがある。こちらが納得しないと買わないのは売る方にだって分かっている、だからまずいものは売らない、必要な分が入らなければなんとしてでも届けようとする、そんな彼らを信用してもいる。だが、出入りの棒手だけを頼みにするわけにもいかない、買わずともやはりやっちゃ場など河岸は見ておきたい、料理自慢を標榜する旅籠の板場にいるからには勘と目を鈍らせたくはなかった。

「…佃煮にするか」

なにげない風に呟いたつもりだったが今度は眉に力が入っていた。そう遠くない場所なのにまだ体が起きていないのかどうもよく動いてくれない。それが若い者を見送つたばかりの満吉には忌々しいことこの上もないのだ。

…と、川沿いを柳原の土手を望むようにして進む、雲が多く空はどんよりしていた。ほのほのと東の空から明けてゆくさまも静かで、まるで小雪でも無いような、心持ちまで暗くなりそうなその濃い色をおもてに映している川を和泉橋から渡つたところだった。

「おト」

旅装束の男と行き違いそうになった。振り分けに脚絆、編み笠を

被っていて顔がよく見えない、が、腰から下げた印籠の房にぐっと目が吸い寄せられた。

「頭じゃないか？」

張りのある声にびんと背筋を伸ばす。

「え、その声は…」

「俺だ。武部だ」

男は笠をひょいと持ち上げるとにこりと笑う、八州廻りの武部藤次郎だった。

『八州廻り』とは公事方勘定奉行関東取締出役の通称である。関東代官の采配で関八州の無宿や博徒などを取り締まる役人で、家屋敷を江戸市中に持ちながら年の三分の二は廻村で留守にしていた。よって、満吉も滅多に町内などでは会わない。ふらりと江戸を発つてはふらりと帰ってきて『千膳屋』に飯を食いに来る、馴染みではあるが気まぐれと言えば気まぐれな客の一人だった。

「ちようど良かった」

旅慣れているというか、江戸に長く留まらないでいるせいか、武部の物言いは武士らしい堅苦しさがない。それは八州の多くの人にふれているからに違いない、と満吉はおもっている。

「どうしたものかと考えていたのだ」

満吉が何か言うよりも早く武部は口にする。急いでいるのはその姿からでもよく分かる、これからまた房州だか上州だかへ行かねばならないのだろう。

「済まないが、娘を預かって貰えまいか」

「は…？」

武部に娘など聞いたこともない。一人息子ならいるのは知っている、いつも大慌てで義兄の元に迎えに行くのを主と見ていたからだ。そう、連れ合いを亡くしてから武部はお役になると息子を親戚に預けていた。

「橋のたもとにいてな、…迷子らしいのだが」

迷子？ 娘？

だが武部は一人だ、周りには誰一人ついていない。

「この度は火急にてすぐさま行かねばならぬ、届けてやることも出来んでな。困り果てていた」

ぼかんとしている満吉をよそに武部は言い募る。

「……」

確かに出立の頃合いに朝のこの時分、空の具合からしてそろそろ六ツになろうとするくらいで人々が起き出すにはまだ少し早い。辺りに人は朝飯のためのものを売る棒手くらいしかない。

「その娘とやらを見かけませんが…」

そうあろうと、武部は黙って頷くと目で橋の向こう、杭に近いところを示した。

「やっと引つ張り出せたのだ。だが、いくら身を明かして論しても寄ってはくれぬ。俺を恐れているのだ」

身の丈はおよそ三尺ほど、蓑を被ったこけし人形のようなものが立っている。

襦袢らしきものの上に汚れた菰を頭から被り、髪もぼさばさで肌

* お願いとおことわり *

本 PDF は試し読みのために作成いたしました。

刊行年の古いものは、当時と現在の製作環境の違いにより、実際の頒布物の見た目と異なる場合がございます。

また、試し読みでは、頒布物の全作品をサンプルにしている場合と、当時の原稿が手元にないなどの事情で、一部作品のみサンプルとしている場合がございますので、あらかじめご了承くださいませ。

なお、有償無償を問わず、本 PDF の内容を、ご自分の作成物として一部、または全てを再配布する、あるいは本 PDF を有償にて再配布する行為はご遠慮くださいますようお願いいたします。

作成：寝床屋

URL: <http://wwbtd.mods.jp/nedocoya/>

Mail: nedocoya@gmail.com

Twitter: [@nedocoya4pr](https://twitter.com/nedocoya4pr)